

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00239

研究課題名（和文）「日本映像カルチャーセンター」に眠る映像コレクションの利活用研究

研究課題名（英文）Practical Use of Film Collection owned by NAVL

研究代表者

奥村 賢（Okumura, Masaru）

明星大学・デザイン学部・教授

研究者番号：30552583

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、前回の科研費研究「『日本映像記録センター』の研究 ～眠る映画遺産の発掘～」を次の段階へと発展させたものである。前回の研究では、フィルムのカタロギングをとおして、日本映像記録センター所蔵のコレクションがいまだに貴重な映画遺産として重要な位置を占めていることを明らかにしたが、今回の研究ではこの一大コレクションの存在意義をいっそう明確なものにするため、これらフィルムの有効活用の実現が映像の領域のみならず、ほかの学術領域におけるあらたな発見や進化も促し、映像文化の枠を越え、学術研究をはじめとする日本文化全体の発展に寄与しうるものであることを実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コレクションには映画史上の古典的作品が多いため、利用環境が整えば映像教育や文化教育におおいに有効活用できる。また、実際、こうした映像資料に注目している研究者は、映画や映像の関係者だけではない。経済学や歴史学、社会学、映像人類学などの貴重な証言者ともなっているこのコレクションは、各種の学術領域でも注目を集めており、そこであらたな研究成果が生まれることも期待される。このことは同資料が日本の学術研究の全体的発展に寄与できることのひとつの証左でもある。

研究成果の概要（英文）：This research have been done on the basis of results of my previous research work “Reserch on Japan Moving Image Center: Rediscovery of Forgotten Film Collection.” This time I have made it clearer that the importance of film collection owned by the Center will be proved if the films are easily accessible .

研究分野：映画研究

キーワード：記録映画 ドキュメンタリー 日本映像記録センター 映画保存 アーカイヴ

1. 研究開始当初の背景

今日、映像についてどれだけ深く理解し、その映像をどれだけ有効に活用できるかが、人間社会の今後の展望を図るうえでますます重要な鍵となってきた。この意味で、過去の映像遺産の発掘、収集、保存、利用は、現代社会にとって、けっして看過すべきではない大きな課題のひとつだといえよう。日本においては、従来、この役割は国立映画アーカイブなどの公共のアーカイブ施設がもっぱら担い、人類がこれまで営々と生み出してきた映画遺産などの収集、保存、公開に務めてきた。しかし予算的にも人材的にも限界があり、実際には対応しきれていないものが圧倒的に多く、いまもって公衆の目にふれることのほとんどない、存在すら忘れさられている映像作品、映像資料が少なからず存在する。その代表格のひとつが「日本映像カルチャーセンター」所蔵の映像資料である。また同資料の多くを占めているのはドキュメンタリーなどの記録映像で、過去の映像資料の活用を求める声がますます高まるなか、とりわけ熱い視線が注がれているのがこの分野だということもあり、本コレクションの活用は二重に重要性を帯びているといえる。いずれにしろ、それらをそのまま放置しておけば再びスクリーンに投映させることが難しいどころか、作品自体が消失してしまうであろうことは論を俟たない。

2. 研究の目的

本研究は、前回の科研費研究「『日本映像記録センター』の研究 ～眠る映画遺産の発掘～」を次の段階へと発展させたものである。前回の研究では、フィルムのカタロギングをとおして、このコレクションがいまだに貴重な映画遺産として重要な位置を占めていることを明らかにしたが、今回の研究では、このコレクションの活用が映像の領域のみならず、ほかの学術領域におけるあらたな発見や進化も促し、映像文化の枠を越え、学術研究をはじめとする日本文化全体の発展に寄与するものであることを明らかにしていく。すなわち、「映像利用」という視点からこの一大コレクションの存在意義をいっそう明確なものにすることを目的とする。

3. 研究の方法

今回の研究では効果的な活用の方法や形態を探る前に、まずコレクションの利用を促す環境を整備した。ひとつは前回のカタロギング完成を受けての、全作品(総計 821 本)のデータベース化である。各種のフィルム情報を記録したデータベースを完成させることによって、利用者は各フィルムの全体像を詳細に把握できるとともに、利用目的に沿った必要な情報のみを即座に入手することが可能となるからである。

また、これらすべての外国映画には日本語が添付されていないが、このこともこれまで活用を阻害してきた要因のひとつとなっていた。この問題を解決するためには、字幕挿入などの日本語添付の方法を探らなくてはならないが、いずれの方法にせよ、日本語訳を準備しておく必要があった。したがって本研究では先の作業と並行し、原語を翻訳して日本語を添付した作品をモデルケースとして何本か作成していった。そしてこれらモデルケースの試写で受容反応などを確かめながら、日本語添付の最適な方法を絞り込んだ。

4．研究成果

(1)データベース化

フィルムのデータベースを完成させ、利用者が各フィルムの全体像を詳細に把握するとともに、利用目的に沿った必要な情報のみを即座に入手できるようにした。

(2)日本語添付の探究

無字幕の外国映画に対し日本語添付の最適な形態を提案し、コレクションのより有効で広範囲な利用を促す基盤をつくった。

(1)と(2)をとおしてコレクションの有効な活用方法や活用形態を立証、提示しえたことで、その有用性をより明確なものにしていく環境を整備できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 奥村賢	4. 巻 196
2. 論文標題 第52回日本映像学会映画文献資料研究会の報告 シンポジウム「『日本映像カルチャーセンター』に眠る映像コレクションの 利活用研究」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本映像学会報	6. 最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奥村賢
2. 発表標題 科研費研究「日本映像カルチャーセンター」に眠る映像コレクションの利活用研究」シンポジウム基調報告
3. 学会等名 日本映像学会映画文献資料研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------